

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院生研究
2007 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	地理学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部史学科・教授		栗田 和明 印		
自然・人文の別	自然	・	○ 人文	個人・共同の別	○ 個人 ・ 共同 名
研究課題名	現代インド社会における都市居住者のオカルト的想像力と村落部の呪医による治療儀礼				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・地理学専攻・博士課程後期課程4年		小松原 秀信 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2007 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

大きく変貌を遂げる現代インド社会において、人々の間で邪術・悪霊などのオカルト的想像力がリバイバルしている。こうした傾向は、都市居住者の場合にも顕著である。ただし、都市居住者が恒常的かつ積極的にオカルトの存在を肯定しているわけではない。しかし実際には、都市部から村落へ邪術・悪霊おとしにくる人々が年々増加している。彼らによれば、邪術や悪霊をおとすには都市にある寺院ではなく、日頃から邪術・悪霊おとしに携わっている村落部の呪医による治療が効果的であるのだという。本研究では、村落部における呪医の治療儀礼と都市居住者による邪術・悪霊おとしのための訪村行為に注目することによって、都市居住者の場所感覚(=主観的空間編成)と彼らのオカルト的想像力・儀礼実践との関係、さらにその背景にある現代インドの社会変容を考慮し、文化人類学的視座から明らかにすることを目的としている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[現代インド社会] [オカルト的想像力] [主観的空間編成]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1990年代以降のインド社会の急激な変化に伴って、宗教文化の基盤そのものが大きく変容しているという指摘がなされている[たとえば Babb1995, 三尾 2003]。インド社会において具体的な胎動となって現れている現象としては、大規模化(スペクタクル化)する都市祭礼や都市のヒンドゥー寺院、次々と誕生する新興(聖者)カルトの存在やインド系移民を通じて世界的展開を見せ始めているヴァストゥー・ヴィディヤ(Vastu Vidiya:古代インドの建築書とその知識)の再興などが挙げられる[Sekine2006]。これら一連の現象に特徴的なのは、商業主義と密接な結びつきがあるということである。たとえば、*International Herald Tribune* 紙(June 11, 2005)の一面に掲載された記事('In booming India, spirituality goes commercial')によれば、Yogiraj Gurunath Siddhanath というグルが、自身の説教を録音した CD の適正価格をいかにして定めるか、またいかにして海賊盤などから録音内容を守るかということ、長時間に渡って弟子たちに説いているという。この現象の背景には、経済自由化以降のインド社会の変容とそれに伴う宗教文化の商品化があることは明らかである。さらにこの記事では、インドの経済自由化における指導的役割を担う人々が、「スピリチュアリティ」に傾倒していつていることを報じている。スピリチュアリティなるものの追求は、人々の苦悩や不安から解放されたいという願望によって発動されている。しかし大規模化した都市の宗教施設は、そのスペクタクル性ゆえに、こうした個別的苦悩や不安を必ずしも十分に受容し、緩和させうるものではない。新興カルトに対する人々の根強い支持は、人々の宗教経験の皮相化に関係がある。現代インド社会の宗教実践は、三尾の言を借りれば、「インドの宗教文化は一層の大衆化・見せ物化の進展と、個別で直接的な信仰経験の追求という二つの極を揺れ動きながら変容を続けつつある」[三尾 2003:58]。

本研究では、近年増加傾向にある都市居住者による治癒儀礼のための訪村行為に注目した。彼らを村落へと向かわせている要因は、単に交通手段の発達による「時間と空間の圧縮」[ハーヴェイ 1999]のみにあるのではなく、都市の大規模寺院では回収できない人々の個別的な苦悩や不安と、その受け皿への希求がその原動力となっている。筆者は調査中、151人(組)のクライアントに聞き取り調査を行い、またアゴール・バーバーの治癒儀礼およびクライアントとの交渉の過程についての参与観察を行った。以下の記述は、その調査の成果をまとめたものである。

ウッタール・プラデーシュ州東部の都市ワラーナシーより北東へ 15km、ワラーナシー・カントンメント駅より乗合リキシャーやバスを乗り継ぎ一時間ほど行ったところにバライー村はある。人口約 4000人(2001年センサスでは、人口 3778人、558世帯)のこの村に、アゴール・バーバーと尊称されるゴーサーイン・カーストの 60歳代のオージャーが住んでいる。彼は 20年ほど前までは政府系銀行の使用人をしてしたが、その後、アゴール系聖者の下に入信・修行し、15年ほど前からバライー村の大きなピーパルの樹の下にアーシュラム(道場・聖所)を構えている。当初、アゴール・バーバーを慕うのは、一族を含む一部の帰依者のみであったが、今では有名なオージャーとなり、多くの信者やクライアントが治病や除災のために彼のもとを訪れるようになっている。クライアントはとくに、厄払いに最適な日とされる日曜日と火曜日の朝にアゴール・バーバーのもとを訪れている。ここで注視したいのが、バライー村内の人間がアゴール・バーバーのもとを訪れるのは稀で、クライアントの多くがバライー村落外から来訪しているという事実である。その中でも近郊都市ワラーナシーや同州のアラハバードの都市居住者の来訪が年々増加している。

以前は銀行の一使用人に過ぎなかったアゴール・バーバーであるが、バライー村内にアーシュラムを築いてからは、この村で一・二を争うほどに急速に財を成した。そのため、バライー村に住むブラーマン・カースト(司祭カースト)やタークル・カースト(地主カースト)などのかつての「支配層カースト」を中心に彼を妬む者も多い。さらに、北インドでは一般に、邪術おとしを行うオージャーは、同時に邪術を仕掛ける際の技術とマントラについての知識も有しているという認識がかなりの程度共有されてため、バライー村民の彼への評判は頗る悪い。そのため、アゴール・バーバーのもとへ治病のために訪れる B 村の住民は極一部の者に限定されている。

一方、バライー村内の噂や人間関係のコンテクストから比較的自由な村落外の住者たちは、オートバイクや自家用車を利用して、熱心にアゴール・バーバーのもとを訪れている。バ

研究成果の概要 つづき

ラーイーン村民の話では、このように度々都市部の人間がこの村までくるようになったのは、ここ数年のことであるという。彼らがバライーン村のアゴール・バーバーのもとへ来訪する事になったきっかけは様々であるが、多くの場合、アゴール・バーバーによって治病や除災に成功したというクライアントが次のクライアントを呼び込んでくる。アゴール・バーバーも、クライアントが新たなクライアントを連れてくることを期待していることもあり、そのネットワークは徐々に拡大している。

アゴール・バーバーの施術は、まずクライアントの煩っている災厄の原因を特定することから始まる。それに際して、アゴール・バーバーはクライアントの家族構成などの基本的な情報に関する質問を行うが、災厄の原因について最終的な宣告がなされるのは、アゴール・バーバーが伝説的聖者キナー・ラーム(アゴール・カルトの開祖、18世紀後半に150歳で三昧に入ったとされる[Parry1994: 252])と交信した後である。アゴール・バーバーは、人間の頭蓋骨によって作られたカップ状の呪物を耳にあてて、クライアントの災厄の原因についてキナー・ラームに伺いをたてる。キナー・ラームによって特定された災厄の原因に基づき、アゴール・バーバーはクライアントが煩っている災厄を除くための施術を行う。この施術はクライアントの額を撫ぜたり、背中を叩いたり、聖灰を降りかけるといったように様々であるが、一回の施術で完全に除災が完了するわけではなく、クライアントには何度か来訪することが求められている。

アゴール・バーバーによって宣告される災厄の原因は、そのほとんどの場合がクライアントの親族や隣人、あるいはビジネスの競合相手によって仕掛けられた邪術や悪霊であるが、実際にはアゴール・バーバーを訪れる以前から、クライアントはこうしたオカルト的な因果をある程度想定している。たとえば、体調不良を患うクライアントの場合、まず最初に西欧医学的な治療を試み、その後にアゴール・バーバーの下を訪れている。インドの西欧医学の水準は高く、村落部も含めて人々の間での西欧医学に対する信頼は絶大である。しかし、その治療が思うような成果を挙げないとき、患者はオカルト的災厄の可能性を疑い、アゴール・バーバーの噂を聞いた者がクライアントとなってバライーン村を訪れることになるのである。

ただし、都市部のクライアントの場合、恒常的かつ積極的にオカルトの存在を肯定しているわけではない。むしろ彼らは一般に、自分たちが高等教育を受け、都市生活をしていることを誇りにもしているため、邪術や悪霊などは村落部(「田舎」)に住む者たちだけの関心事であると考えている。しかし実際には、こうした認識が彼らを村へと向かわせている。というのも、彼らは、ひとたび邪術や悪霊に苛まれることがあれば、それをおとすには都市にある寺院ではなく、日頃から邪術・悪霊おとしに携わっている村落部の呪医による治療が効果的であるという認識も同時に有しているからである。つまり、都市居住者による邪術・悪霊おとしのための訪村行為には、彼ら自身の村落に対するイメージが影響を与えている。

都市と村落社会とはヒト、モノ、カネ、情報などの移動を通じて密接に結びついており、その境界は明確に線引きできるようなものではない。しかしその一方で、人々の間では「都市と村落」に対するある種のイメージや場所感覚が保持されているということも事実である。ここで言う場所感覚とは、調査対象地の人々の身体性に根ざした、自身の生活の場としての「こちら」とわからなさが付随する場としての「あちら」というような、主観的空間編成と同義である。主観的空間編成は、行政的・地理的な空間区分、あるいは土地や建築物などの物質的な諸要素から影響を受けながらも、むしろ、個々人の生活世界での社会的行為や関係性を通じて不断に産出され続ける想像力によって成立している。その意味で、主観的空間編成においてその中心となるのは常にその想像力の主体である。都市居住者の「邪術や悪霊などは村落部の人間の関心事である」という言説は、その主体の生活の場である「ホーム」としての都市と、主体の生活の場から離れた、ある種のわからなさ(オジェ[2002]の言う「他性」)が伴う「アウェイ」としての村落社会という主観的空間編成を基に生み出された、彼ら自身の想像力の発露といえるだろう。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

小松原秀信 「『被害者』の想像力としての邪術—北インド U.P.州 B 村のトーナーの事例より—」、『南方文化』第 34 輯、2007 年、pp.113-128。

④ 口頭発表

小松原秀信 「他者への想像力としての邪術—北インド U.P.州 B 村のトーナーの事例より—」、2007 年 7 月 15 日 第 40 回南アジア研究集会 (於:静岡県清水市)。